



Title	初期商務印書館研究
Author(s)	樽本, 照雄
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58772
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	樽本照雄
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(言語文化学)
学位記番号	乙第1号
学位授与年月日	平成15年7月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当 論文博士
学位論文題目	初期商務印書館研究
論文審査委員	主査 教授 青野繁治 副査 教授 森藤一史 副査 教授 西村成雄 副査 教授 田中仁猛 副査 教授 佐々木 猛

論文の内容要旨

●主旨

本論文は、初期商務印書館の歴史を、日本金港堂との合併問題を中心にして、中国側からと日本側からの両方にまたがって総合的に記述することを主旨とする。結果として、清末から民国初期にかけて、すなわち1900年代と1910年代に存在した日中出版社交流の特異な一事例を、歴史の闇の中から掘り起こすことになった。

●要旨

商務印書館は、清朝末期、上海に創業した印刷会社のひとつである。キリスト教会関係の請負印刷から始め、のち教科書出版に進出した。さらには一般出版物の分野において事業を大いに発展させる。他の出版社との競争に勝ち抜き、現在では、創設から百年以上の歴史をもつ中国唯一の出版社になっている。

その百年をうわまわる商務印書館の歴史のなかで、特異ともいえるべき一時期がある。創業(光緒二十三年1897)して間もない1903年(光緒二十九年)から1914年(民国3)までの約10年間、商務印書館は、日本の出版社金港堂との合併会社だったのだ。

商務印書館は、そのうち中国出版界において巨大企業となった。その事業発展の基礎を確立するのに決定的な役割をはたしたのが、金港堂との合併である。この合併なくしては、営業、編集、印刷の3分野における商務印書館のあゆみは、ずいぶん違ったものになったであろう。

ただし、外国資本との合併が、すべての面においてプラスに働いたわけではなかったのも事実だ。中国国内で政治的な批判的にされたのは、この日本企業との合併が理由であった。その後には、清朝から中華民国への大転換という歴史の流れがある。

商務印書館の創業から日本・金港堂との合併時期を合計した足掛け18年間をさして、特に、初期商務印書館と称する。

金港堂との合併こそは、初期商務印書館が印刷業から出版業へ発展する際の重要な転機であった。

だが、その重要性にもかかわらず、商務印書館が、過去において日本の出版社との合併会社で

あったというこの事実は、広く知られてはいない。両社の合併問題は、中国近代出版史研究の分野において、ほとんど無視されるという状況が長くつづいた。

ゆえに、商務印書館と金港堂の合併については、その詳細が明らかではなかった。この謎にみちた日中出版社交流の実態を、博搜した資料に基づいて明らかにしたのが本論文である。

中国の研究界において、商務印書館と金港堂の合併問題が、なぜ無視されたのか。

ひとつは商務印書館内部の事情があった。

商務印書館は、当初から、金港堂と合併した事実を隠そうとした。なぜなら、商務印書館にとっては、金港堂との合併はやむをえない選択だったからだ。経営に行き詰まっていたところに出現した金港堂に助けを求めたというのが事実である。積極的に宣伝する状態ではなかった。これが商務印書館の内部事情だ。宣伝するどころか、合併の事実を積極的に隠そうとしているから、それに気づく研究者は多くない。

ひとつは当時の政治的背景があった。

民族独立を主張する清末の政治状況においては、外国資本との合併会社であることは、外向きの営業に有利になるわけではない。かえって競合会社より攻撃を受ける理由となる。自己防衛のために、日本との合併会社である事実には触れないようにしたのだ。

ひとつは研究界の風潮があった。

外国企業との合併を研究することはタブーである時代が、中国の研究界には、あった。商務印書館と金港堂の合併問題は、それゆえに無視された。調査に着手する研究者が出てこなかった理由である。

一方、日本では、中国の学界が扱わない問題だから、問題そのものが存在しているということに長い間注意を向ける研究者がいなかった。

たとえ問題があることに気づいていたとしても、金港堂は、消滅しており喧伝されることがない。金港堂そのものが存在していない以上、探索する手掛かりは残されていないと思われていた。

以上が、日中両国において両社の合併問題が積極的に研究されなかったおもな理由である。

その結果、商務印書館は、あたかも独力で家庭内工業的印刷工場から近代的出版社へと発展していったような印象をあたえ続けている。近代的出版社へ飛躍するその転機には、日本・金港堂の協力が存在したという事実が無視されているのだ。

本論文は、商務印書館創立の経緯と初期出版物の探索、日本金港堂との合併にいたる状況、合併の内容、さらに合併解消の詳細を、世界ではじめて解明する。

各章は以下のように構成されている。

第1章 商務印書館

主として、中国商務印書館の創業から日中合併直前にいたるまでの状況をのべる。

創業者のひとり夏瑞芳の動きを記述し、くわえて初期印刷物についても紹介する。

初期商務印書館を代表する人物といえ、夏瑞芳をあげなければならない。創業を決意し、日本金港堂との合併を推し進め、それを解消した人物である。

清朝末期から中華民国の初期にかけて、時代が大きく転換した時代に、夏瑞芳は、商務印書館営業の舵を取りながら、自らも揉まれつつ時代の荒波を乗り切る原動力そのものだったといっている。夏瑞芳自身は、日本資本を回収した直後に暗殺されるという不運に見舞われた。初期商務印書館は、別のいいかたをすれば、夏瑞芳の時代だということもできよう。

商務印書館の関係者のひとり張元済を中心にすえて説明した書籍は、複数存在する。だが、夏瑞芳に焦点をあてて経営の側面から記述するのは、本論文が最初である。

夏瑞芳が手掛けた英語教科書、張元済および印錫璋との親交と彼らから援助をえたこと、編訳所の設立まで、また、経営困難からいかに脱出したのかなどなどの詳細をたどる。

たとえば、火災に襲われながら巨大印刷所を建設できたのはなぜなのか。そもそも商務印書館自が失火によって焼け出された事実すら共通の認識にはなっていない。失火の直後に巨大な印刷工場を建設しているという不可解な事情を説明する論文は、ほとんどないのだ。私が提出する仮説は、その背後には、はやくから金港堂の存在があったことを指摘する。すなわち、中国大陸で教科書出版を行なうことを計画していた金港堂が、商務印書館と正式な合併契約を結ぶ以前から実質的な投資をはじめていたということだ。

第2章 金港堂

商務印書館の合併相手である日本・金港堂の創業から、中国大陸との関係が生じることになった人間の結びつきについて概観する。金港堂側からの記述である。

長尾雨山が、商務印書館で教科書編集に従事していたのは有名な話だ。長尾雨山は、もともと東京高等師範学校教授をつとめていた。その長尾が、教授の地位を捨てて上海に移住し、商務印書館に勤務することになったのは、なぜか。大きな謎であった。金港堂の動きを追跡していく過程で、私は教科書疑獄事件の詳細をあきらかにした。長尾雨山にまつわる謎を解くカギがそこにあった。すなわち、教科書疑獄事件に長尾雨山が連座していたのだ。当時の新聞に掲載された裁判記録を調査して、長尾の収賄罪が決定したことをつきとめた。これが長尾を上海へ赴かせた理由である。

さらには、商務印書館の夏瑞芳と金港堂の原亮三郎を結びつける人物が山本条太郎であることも明らかにする。

山本は原亮三郎の娘婿であった。山本が三井物産上海支店長となったおりに、原亮三郎からかねて依頼のあった上海における出版業の可能性について調査し、その過程でうかびあがってきたのが商務印書館だ。商務印書館の株主になっていた印錫璋は、紡織関係で山本条太郎ともともと懇意の間柄であったという因縁がある。

従来、金港堂の商務印書館への投資ということがいわれている。投資の主体は、組織としての金港堂であると考えられていた。しかし、実は原亮三郎の個人の投資であった。この事実を発掘することができたのも、私が当時の事情を知っている関係者に連絡をとった結果である。

第3章 日中合併

商務印書館と金港堂の合併成立からその解消までを、経緯、内容、人的交流にわたって検討する。

日本人と中国人の共同編集による教科書『最新国文教科書』の作成、ライバル出版社中国図書公司との闘争、夏瑞芳のゴム投機失敗、張元済の対策、中華書局との対立などの詳細を明らかにし、最後には、合併解消時に両社が獲得した総合利益の算出を行なう。

合併解消の経緯は、従来、不明のままだった。鄭孝胥日記を調査することによりその詳細を知ることができた。

合併解消にあたって株価の算定が交渉の課題となっている。その結果は、金港堂は利益を得ることになったが、商務印書館はそれをうわまわる多額の評価益を手に入れた。不動産などは、上

海に置いたままだから、まさに、商務印書館の圧勝ということができよう。

第4章 初期商務印書館の精神分析

日中合併事業がどのように評価されたのかを、商務印書館の当事者による証言、あるいは中国人研究者の発言にもとづいて検討する。

商務印書館は、金港堂との合併成立直後から、合併の事実を隠したがっていた。また、商務印書館が自らを被害者のように演じ表現してきたのは、なぜか。商務印書館の当事者、あるいは中国の研究者たちの心の奥底にある心理状態を明らかにする。

商務印書館が金港堂との合併で得たのは、営業、編集、印刷のノウハウが大きい。金銭で評価できないほどの価値をもつものだ。これこそが商務印書館が近代的出版社に脱皮するための要件であった。これに加えて株価の算定でも商務印書館は利益を得ている。事実の多くが商務印書館に圧倒的に有利であったことを証明している。だが、商務印書館は、対外的には、一貫して被害者であるかのようにふるまった。

合併時に味わった日本の巨大出版社に呑みこまれるのではないかという恐怖心が底にある。これが、商務印書館に被害者のような態度を取らせた直接の心理的理由である。さらに、自らが金港堂から得た有形無形の利益の大きさを隠蔽したいという心理が加わった。まことに複雑な心理状態であったといえよう。

商務印書館と金港堂の合併事業について、いままでは、その詳細が謎につつまれていた。資料の発掘もなされていなかった。本論文が、日本と中国をつうじて、研究者の誰もなしえなかった多数の事実を発見し、合併の実態を明らかにしたことは、いくら強調してもしすぎることはない。

論文審査の結果の要旨

本審査委員会は、提出された申請者の経歴、業績目録等および博士論文について、審査を行なった。その概要は以下の通りである。

樽本照雄氏の専門分野は、中国近代文学の草創期ともいえるべき、19世紀末から20世紀初頭にかけて、活発な活動をくりひろげたいわゆる清末小説である。氏はすでに30年に及ぶ清末小説研究歴を有し、180点におよぶ論文を執筆している。それらは三冊の論文集『清末小説閑談』(1983)『清末小説論集』(1991)『清末小説探索』(1998)にまとめられ、いずれも法律文化社から出版されている。

氏の研究活動の特徴は、たゆまない資料の収集、整理、また海外とくに中国の研究者との積極的な情報交換の日常化にあると考えられる。その表れは氏の主宰する清末小説研究会であり、その機関誌『清末小説』である。同誌は1977年創刊以来の活動を評価されて、財団法人橋本循記念会により第6回蘆北賞を受賞している。また『清末民初小説目録』『清末民初小説年表』『日本清末小説研究目録』などは、資料の整理に力を注ぐ氏の姿勢をよくあらわしており、当該分野における研究者にとって、有用な研究資料を提供するものとして、高く評価されている。その結果、『清末民初小説目録』『清末民初小説年表』は第9回蘆北賞を受賞している。

今回の提出論文『初期商務印書館研究』は、清末小説に関するこのような地道な資料の整理作業と研究活動のなかから生まれた樽本氏の初の専門的著作であり、清末民初における文学書や雑誌、各種教科書の出版を担った商務印書館という書店の草創期を扱った労作である。

氏は「作品、作家、出版社の三方面から清末小説は研究されなければならない」「商務印書館研究は清末小説研究に欠かせない部分を構成する」という認識に立ち、文学研究者としての問題意識で、書店の創設から創立者夏瑞芳の死にいたる初期商務印書館を論じており、その意味で本論文は、氏の清末小説研究全体を補完する意味をもっている。

論文の構成は、全四章立てで、各章の表題は以下の通りである。

第一章 商務印書館

第二章 金港堂

第三章 日中合弁

第四章 商務印書館の精神分析

第一章は、キリスト教会関係の印刷物を請け負う小さな印刷会社として出発した商務印書館の創立にかかわった人物、初期の出版物、教科書編纂事業、また日本の資本を導入するにいたる要因である経営の困難などについて、詳細にその実態を論述している。第二章では、日本の出版社金港堂の概略、長尾雨山と教科書疑獄事件、金港堂の大陸進出計画、娘婿で三井物産上海支店長である山本条太郎を通じた金港堂社主原亮三郎による商務印書館への投資の背景が明らかにされる。第三章は、中国側関係者の証言を吟味しつつ、商務印書館が日中合弁的経営を取り入れた事情を叙述するとともに、辛亥革命前後の中華民族主義によって外資導入が批判されたことを背景として、純粹中国資本を標榜するライバル出版社の攻勢を受ける立場にあったことを明らかにし、それが商務印書館の日本資本回収、合弁関係清算の原因であったことを指摘している。初期商務印書館は創立者夏瑞芳の死で終りを告げるが、それが中華民族主義による暗殺であったことは示唆的である。最後の第四章は、第三章を受けて、商務印書館にはその後も「日中合弁」を隠す傾向があることを指摘し、現在でも初期における民族主義攻勢のトラウマから立ち直っていない商務印書館が、「日中合弁」において利益を得たことから目をそむける心理を有していると分析する。

業績審査の過程において、一部に見られるエッセイ風の文体、注釈の付け方、一部資料の扱いの妥当性に関して異なる意見が出されたが、審査委員全体としては、本論文が中国の巨大出版社である商務印書館の創立から創立者の死にいたる「初期商務印書館」の実態に関して大量の中国側資料を渉猟し、また日本の金港堂に関する資料を丹念に掘り起こした結果書き上げられた、中国現代史研究、中国文学史研究、日中文化交流史研究のいずれの領域においても前例のない先駆的研究成果である、という点で意見が一致した。特に金港堂の経営の実態を詳述し、長尾雨山と教科書疑獄事件を扱った第二章部分は、中国の研究者には調査困難な事実も含まれており、今後の当該分野の研究に貴重な資料を提供するものであるとともに、中国におけるあらたな研究の展開にも寄与するものである。

商務印書館の教科書出版が、清朝統治下における国民の形成・統合を背景とするものであり、中華書局との教科書をめぐる熾烈な競争において表れた中華民族ナショナリズムと対立する必然性をもっていたことは、論として十分展開されてはいないが、それを明らかにするだけの資料の掘り起こしは成されており、今後の研究の展開に関しても期待できるものである。

以上の審査内容に基づき、本審査委員会は、本論文が博士の学位に値するものであると判断する。

平成 15 年 7 月 1 日